

**第167回
日耳鼻長崎県地方部会学術講演会
【プログラム・抄録集】**



令和3年12月4日（土）15時00分～

ご案内

昨今の新型コロナウイルス感染症の事情を鑑み、Zoomを使用したオンライン開催とさせていただきます。

【注意事項】

1. ご自宅、ご自身の診療所など通信環境の整った場所からのアクセスをお勧めします。可能であれば有線 LAN でのご利用をお勧めします。
2. 会員以外のアクセスを防止するため、ID やパスコードを他人に教えな
いください。
3. 講演会の録画は固くお断りいたします。
4. 出席は端末のアクセス履歴で確認いたします。基本的には一人一端末
でご参加ください。
5. 講演会の間、ご自身の端末のマイクとカメラは off にしてください。
発言がある場合は挙手していただき、司会・座長から指名されたらマイク
とカメラを on にしてご発言ください。
6. 音声聞こえない、画像が見えないなどトラブルがありましたら、下
記までご連絡ください。

【連絡先】

長崎大学耳鼻咽喉科学教室：095-819-7349

演者の方へ

【発表時間】 1 題 10 分（発表 7 分、質疑 3 分）時間厳守

発表の際には司会・座長の指示に従って、マイクとカメラを on にしてくだ
さい。

【会長挨拶】 15:00～15:05

熊井良彦（長崎大学）

【一般演題】

第Ⅰ群：15:05～15:45

座長 中尾信裕（佐世保市総合医療センター）

- I-1 下咽頭から甲状腺に迷入した魚骨異物の1例
大久保佑香（佐世保市総合医療センター）
- I-2 多発肺転移を伴う耳下腺癌との鑑別を要した多発血管炎性肉芽腫の一例
二宮直樹（長崎大学）
- I-3 両側耳下腺内膿瘍で発症した猫ひっかき病の1例
松井彰子（長崎大学）
- I-4 乗り物酔いとめまいに伴う嘔気の関係
野田哲哉（野田耳鼻咽喉科）

第Ⅱ群：15:50～16:30

座長 吉見龍二（長崎みなとメディカルセンター）

- II-1 頭頸部癌を示唆する症状の認知度アンケート調査
松本浩平（長崎医療センター）
- II-2 下咽頭癌進行例における下咽頭喉頭全摘・遊離空腸再建術の許容される待機期間について
小野晋太郎（長崎医療センター）
- II-3 新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）陽性者に対し気管切開術を施行した2例
中村真優子（長崎みなとメディカルセンター）
- II-4 新型コロナウイルス罹患後にサイトカインストームの病態を呈し、頭頸部領域の重症感染症を併発した一例
近松春奈（長崎原爆病院）

【同門会学術奨励賞・学術賞】 16:35～17:20

司会 金子賢一

●学術奨励賞：高島寿美恵

演題名：局所麻酔下に外来日帰りで行う経口的喉頭内視鏡手術

●学術賞：佐藤智生

演題名：Prevalence and characteristics of children with otitis media with effusion in Vietnam

【長崎県耳鼻咽喉科病診連携研究会総会】 17:20～17:50

司会 長崎県耳鼻咽喉科病診連携会長 野田哲哉

会計報告 西 秀昭（長崎大学医局長）

【連絡事項】

木原千春（長崎大学）

【一般演題 第I群】

I-1 下咽頭から甲状腺に迷入した魚骨異物の1例

○大久保佑香¹⁾、桂 資泰¹⁾、前田耕太郎²⁾

1) 佐世保市総合医療センター 耳鼻いんこう科

2) がん研究センター東病院 頭頸部外科

咽頭異物は耳鼻科一般診療において、比較的良好に遭遇する疾患である。咽頭異物の中でも、魚骨は高い割合を占めそのほとんどが経口的な摘出が可能であるが、稀に咽頭外に迷入し外切開での摘出を要することがある。今回は下咽頭から甲状腺内に魚骨が迷入し甲状腺葉峡切除を行って摘出した症例を経験したため報告する。

症例：98歳、女性

3日前にメジナの炊き込みご飯を接種後から咽頭痛が持続し近医耳鼻科を受診した。喉頭ファイバー検査で右披裂の腫脹を認めるも異物が確認できず精査目的に当科紹介となった。

当科の喉頭ファイバーでも異物は確認できなかったが、異物残存の可能性が否定できなかったため頸部CTを施行した。CTにて下咽頭から甲状腺右葉内にまで達した26mm大の魚骨を認めた。上部消化管内視鏡検査で摘出を試みたが粘膜面は正常で魚骨は確認できなかった。異物は咽頭外に完全に迷入していると考えられ外切開による摘出が必要と判断し、緊急手術を行った。

手術所見：下咽頭収縮筋から甲状腺を貫通して胸骨舌骨筋にまで到達する魚骨を認めた。魚骨のみの摘出を試みたが甲状腺と固着しており困難であった。無理に引き抜くと甲状腺損傷のリスクがあることや既に感染が成立している可能性もあるため甲状腺右葉峡切除を行い摘出することとした。手術時間は1時間41分で出血量はごく少量であった。

術後経過：反回神経麻痺は認めず咽頭痛の著大な改善あり。術後3日目より経口摂取を再開し術後6日目に退院した。

咽頭腔外魚骨異物は0.4-2.6%と稀である。しかし、診断が遅れた場合などは頸部膿瘍など重篤な合併症を来しうるため積極的にCT検査を行い早期診断に努めるべきと考えられた。

【参考文献】

- 1) 橋本雄一、他：甲状腺に達した下咽頭魚骨異物の1例. 口腔・咽頭科 32:61-65, 2019
- 2) 和田伊佐雄、他：21年間の咽頭異物翔の臨床像の検討. 口腔・咽頭科 20:369-375, 2008

I-2 多発肺転移を伴う耳下腺癌との鑑別を要した多発血管炎性肉芽腫の一例

○二宮直樹、大野純希、熊井良彦

長崎大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

【症例】72歳、男性

【主訴】左耳下腺腫瘍

【現病歴】数週間前から増大する耳下腺腫瘍を認め精査目的で当科を受診した。左耳下部に弾性硬で可動性不良の圧痛のある30mm径の腫瘍を認めた。顔面神経麻痺は認めなかった。頭頸部造影MRIで左耳下腺内に境界はやや不明瞭で辺縁が早期に濃染される腫瘍病変を認めた。悪性腫瘍を疑い穿刺細胞診を施行したがclass IIで悪性所見は認めなかった。画像上悪性を否定できないため精査のために施行した頸胸部造影CTで最大35mm大の肺癌を疑う複数の腫瘍を認めた。以上の所見から耳下腺癌の肺転移や原発性肺癌を鑑別診断と考え、気管支鏡下洗浄細胞診を施行したところ、悪性所見は認めず肉芽腫と一部壊死を伴う病変を認めた。この結果から全身性血管炎を疑い精査したところPR3-ANCA陽性で、耳下腺腫瘍以外に左鼻腔ポリープ、左滲出性中耳炎を認めた。以上より最終的に多発血管炎性肉芽腫(GPA)と診断し、大量コルチコイド+シクロホスファミドの併用療法による寛解導入療法を開始した。その後耳下腺病変、肺病変はともに著明に縮小した。

【考察】GPAは中小血管の壊死性血管炎を呈し、上気道病変(鼻、眼、耳、口腔・咽頭)と肺病変、腎病変が特徴的であり、耳下腺に病変を認めることは稀である。当初は耳下腺悪性腫瘍と思われたが、精査した結果PR3-ANCA陽性で肺と鼻腔、中耳に病変を認めたことからGPAと最終的に診断した。今後は耳下腺病変の鑑別診断のひとつとして念頭に置くべきと考えた。

I-3 両側耳下腺内膿瘍で発症した猫ひっかき病の1例

○松井彰子、佐藤智生、熊井良彦

長崎大学病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科

耳下部腫脹を呈し一旦は耳下腺腫瘍を疑われたが、最終的に猫ひっかき病の診断に至った症例を経験した。

症例は66歳男性、右耳下部腫大と発熱を認め、近医で耳下腺炎に準じた加療をされたが、改善しなかったため当院を 紹介受診した。

初診時に右耳下腺の著名な腫大と軽度の圧痛、発熱をみとめた。採血ではWBC 7700/ μ L、CRP 5.8 mg/dL と軽度の炎症反応を認めた。造影MRIは両側耳下腺内に多発性の膿瘍をみとめた。穿刺吸引細胞診では膿成分が少量確認されたが、一般細菌培養検査では菌体が確認できなかった。以上からウイルス感染症、結核性リンパ節炎、菊池病、および猫の飼育歴から猫ひっかき病を鑑別診断として各種検査を進めた。最終的に、バルトネラ抗体検査でIgM抗体およびIgG抗体陽性を認めたため、猫ひっかき病と診断を確定した。アジスロマイシン投与で加療を行い、初診から27週ほどで寛解を得た。

猫ひっかき病は通常、受傷部位の所属リンパ節腫脹を呈することが多い。そのため頸部リンパ節腫脹の症例として経験することが一般的であり、本症例のように耳下腺内膿瘍として経験することは稀で、悪性腫瘍を含めた様々な疾患との鑑別を要した。本症例は画像所見で多発性の膿瘍をみとめたが、一般細菌による感染ではなかったことより猫ひっかき病が鑑別に上がった。また、病歴聴取により猫の飼育歴が確認されたのでバルトネラ抗体検査から診断に至った。以上から耳下腺内に膿瘍形成を認めた際に、本疾患を鑑別診断の一つとして念頭に置き、全身の診察や細かな病歴聴取を行うことが重要であると考えた。

I-4 乗り物酔いとめまいに伴う嘔気の関係

○野田哲哉

野田耳鼻咽喉科

めまいに伴う症状として嘔気や嘔吐などの自律神経症状があるが、すべてのめまい患者にあるわけではない。今回はめまいに伴う嘔気に着目して、乗り物に酔いやすい者と酔いにくい者の嘔気を調査した。

2016年8月からの5年間にめまいを訴えて野田耳鼻咽喉科を初診で受診した者の中で、カルテに乗り物酔いと嘔気の有無が記載されている男性198例と女性605例を対象者とした。対象者は30歳台～70歳台が多く、平均年齢は男性が54歳で、女性が53歳であった。

男性では乗り物に酔いやすい者が33例(16.7%)で、そのうち21例(63.6%)に嘔気を伴っており、酔いにくい者が165例で、そのうち92例(55.8%)に嘔気を伴っていた。女性では酔いやすい者が212例(35.0%)で、そのうち161例(75.9%)に嘔気を伴っており、酔いにくい者が393例で、そのうち224例(57.0%)に嘔気を伴っていた。男性では統計学的に有意差が認められなかったが、女性では有意差があり、乗り物に酔いやすい者は酔いにくい者よりめまいに伴う嘔気を伴う割合が高いといえた。また、嘔気を伴う者が伴わない者より乗り物酔いの割合が高いともいえた。

対象期間に新しくカルテを作成した10歳以上の新患の乗り物に酔いやすい者の割合は男性が15.7%で、女性が27.8%であった。めまい患者と比べると、男性では統計学的に有意差が認められなかったが、女性では有意差があり、めまい患者では乗り物に酔いやすい者の割合が高いといえた。

今回の研究で乗り物酔いとめまいに伴う嘔気は関係があることが示唆された。めまい患者で乗り物に酔いやすい者の割合が高くなるのは、めまいに伴う嘔気を伴わない患者よりも嘔気を伴う患者の方が来院する割合が高かったためだと思われる。

【参考文献】

- 1)野田哲哉：乗り物酔いの平衡機能障害説
<https://www.norimonoyoi.jp/theory/theory.pdf>
- 2)安村佐都紀，他：温度刺激検査時の自律神経症状と対策—嘔気症状とその要因—
Equilibrium Res 62:555-562, 2003

【一般演題 第Ⅱ群】

Ⅱ-1 頭頸部癌を示唆する症状の認知度アンケート調査

○松本浩平、小野晋太郎、森 彩加、田中藤信
長崎医療センター 耳鼻咽喉科

【はじめに】

頭頸部扁平上皮癌の放射線治療において、治療開始遅延は生命予後に悪影響を与える事が明らかにされており¹⁾、1カ月の治療開始の遅延で再発率が3.7%上昇するとされる²⁾。よって、速やかな治療開始は頭頸部扁平上皮癌の放射線治療成績向上に必要不可欠である。しかし、頭頸部癌に特異的な症状はなく、その初期症状は他の良性疾患でも生じる一般的な物が多い。そのため、初診診療科として耳鼻咽喉科以外を受診することがあり、結果として診断や治療開始が遅れる症例が散見される。このような経験を通じて、一般市民における頭頸部癌を示唆する症状の認知度が低いのではないかと疑問に思い、その実態を調査したので報告する。

【目的】

一般人における頭頸部癌を示唆する症状の認知度を明らかにする。また、どの程度症状が持続したら医療機関の受診を想起するか調査する。

【対象・方法】

2021年1月～8月までの期間に地域連携枠で当科を受診した患者にアンケート調査を実施した。頭頸部癌の知識を有する集団を除外するため、中耳炎、聴覚障害、平衡機能障害、顔面神経麻痺、慢性副鼻腔炎の精査目的に受診した症例を対象とした。

【結果】

対象は114例だった。頸部腫瘍で耳鼻咽喉科への受診を想起する割合は12.3%で、嚥下時痛・嚥下困難感・嘔声よりも有意差を持って低かった。また、頸部腫瘍は咽頭痛・嚥下時痛・嚥下困難感・嘔声よりも医療機関への受診を想起するまでに時間を要する結果であった。頸部腫瘍は他の頭頸部癌を示唆する症状よりも認知度が低いと思われる。頸部腫瘍を自覚する際は耳鼻咽喉科を受診するよう一般市民へ啓蒙する必要があると考える。

【参考文献】

- 1) Evan M, et al.: Association of Treatment Delays With Survival for Patients With Head and Neck Cancer: A Systematic Review. JAMA Otolaryngol Head Neck Surg 145:166-177, 2019
- 2) Chen Zheng, et al.: The relationship between waiting time for radiotherapy and clinical outcomes: a systematic review of the literature. Radiotherapy and oncology 87:3-16, 2008

Ⅱ-2 下咽頭癌進行例における下咽頭喉頭全摘・遊離空腸再建術の許容される待機期間について

○小野晋太郎、松本浩平、森 彩加、田中藤信
長崎医療センター 耳鼻咽喉科

【はじめに】

下咽頭癌進行例に対する根治的手術の方法として、下咽頭喉頭全摘・遊離空腸再建術がある。周知のとおり、本術式はすでに確立されたもので、根治性も十分に証明されている。しかしながら、手術施行に際して他診療科との協力が不可欠であり、手術の日程調整に難航する場合がある。その結果、予定外の導入化学療法を施行する症例や、化学放射線療法に治療方針を転換する症例もしばしば経験される。許容される手術待機期間を明らかにすることで、不要な導入化学療法や、化学放射線療法への方針転換を抑制できる可能性があると考え、本検討を行った。

【目的】

下咽頭癌進行例に対する下咽頭喉頭全摘・遊離空腸再建術の手術待機期間と生命予後の関係を評価し、どの程度の遅延まで許容されるかを明らかにする。

【対象・方法】

2014年2月～2019年3月の期間(5年間)に長崎医療センターおよび、長崎大学病院で初期治療として下咽頭喉頭全摘・遊離空腸再建術を施行した下咽頭癌例を対象とした。対象例における病理診断～手術までの期間を手術待機期間と定義した。手術待機期間と無再発生存期間を統計学的に解析した。

【結果・考察】

本検討では手術待機期間と無再発生存期間の間に関連を認めなかった。しかしN2以上の症例のみに対象を絞ると、手術待機期間が31日以上の群と比較して30日以内の群は、無再発生存期間が長くなる傾向を認めた。手術待機期間が長い症例における、術前導入化学療法の適応を判断する材料として、症例の進行度を検討する余地があると考えた。

【参考文献】

- 1) 前田明輝、他：下咽頭扁平上皮癌に対する下咽頭喉頭頸部食道摘出術の治療成績
頭頸部癌 39:456-459, 2013

II-3 新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）陽性者に対し気管切開術を施行した2例

○中村真優子、吉見龍二、高橋晴雄

長崎みなとメディカルセンター 耳鼻咽喉科

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、長期挿管管理を必要とする患者がしばしばみられる。新型コロナウイルスの感染経路は飛沫感染・接触感染とエアロゾル感染であるため、いずれにも関連する気管切開術では十分な感染対策が必要となる。当院でも新型コロナウイルス感染患者で気管切開術を必要とする症例を2例経験した。

症例1は65歳男性、呼吸状態の悪化に伴い第7病日に挿管され人工呼吸器管理となった。

2週間以上の挿管管理となり第23病日に気管切開術を行った。

症例2は68歳男性、症例1と同様に呼吸状態の悪化に伴い第5病日に挿管され人工呼吸器管理となり、第26病日に気管切開術を行った。

いずれも新型コロナウイルス感染患者病棟の個室病室にて full-PPE を装着し手術を行った。

術中はエアロゾル発生の観点から気管開窓からカニューレ挿入終了まで人工呼吸器による換気を中止した。また手術介助や器具の操作に習熟している観点から、手術には手術室看護師の同席を依頼した。

感染制御や術中管理について文献的考察を踏まえ報告する。

【参考文献】

- 1) 日本耳鼻咽喉科学会 新型コロナウイルス感染症対応ガイド 気管切開の対応ガイド
- 2) 福間 博、他：新型コロナウイルス感染（SARS-CoV-2）陽性患者に対し外科的気管切開術を施行した経験 日救急医学会誌 31:333-8, 2020

II-4 新型コロナウイルス罹患後にサイトカインストームの病態を呈し、頭頸部領域の重症感染症を併発した一例

○近松春奈、隈上秀高

長崎原爆病院 耳鼻咽喉科

新型コロナウイルス (COVID-19) 感染における耳鼻咽喉科領域の合併症としては、嗅覚・味覚障害が知られている。しかし、COVID-19 罹患後のサイトカインストームが関与した合併症はこれまで報告されていない。

症例は既往歴のない 22 歳男性。COVID-19 に感染し、自宅療養 2 週間後に PCR 検査陰性を確認されて療養解除となった。その 20 日後より発熱、頭痛、咽頭痛を生じ他院内科を受診したが、COVID-19 抗原検査、PCR 検査いずれも陰性であった。急性副鼻腔炎を疑われ抗生剤を処方されたが改善なく、前医耳鼻咽喉科を受診し当院紹介受診となった。

来院時、40°C を超える発熱がすでに 4 日持続しており体動困難であった。両側頸部リンパ節腫大を伴い、CT では咽後膿瘍を疑う所見のほかに、著明な脾腫を生じていた。血液検査では、COVID-19 感染における重症化の指標といわれている血中 D-dimer 値、FDP 値の上昇、PT 延長、IL-6 値上昇、IL-2R 値上昇⁽²⁾⁽³⁾の全てがみられた。

生来健康な若年男性にこのような重篤な頸部感染症が起こるとは考えにくく、血液データや CT 所見から判断しても、背景にサイトカインストームの関与があると思われた。COVID-19 罹患後、症状が改善し PCR 検査が陰性を呈している状態であっても、サイトカインストームが遷延し頭頸部領域に重症感染症を惹起する可能性があると考えられる。

【参考文献】

- 1) 朝倉英策：COVID-19 と凝固検査. 血栓止血誌 31:604-618, 2020
- 2) 丹正勝久、他：新型コロナウイルス SARS-CoV-2 による COVID-19 重症化の機序と重症化予測マーカーについて. 日在救医会誌 (JJSHEM) 4:38-46, 2020
- 3) Moore JB, et al.: Cytokine release syndrome in severe COVID-19. Science 368: 473-474, 2020

【同門会学術奨励賞】

○高島寿美恵

局所麻酔下に外来日帰りで行う経口的喉頭内視鏡手術

高島寿美恵¹⁾、金子賢一²⁾³⁾

- 1) 長崎大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科
- 2) 長崎大学病院医療教育開発センター
- 3) 済生会長崎病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科

耳鼻と臨床 66:163-167, 2020

経鼻的に軟性内視鏡、経口的に鉗子等を挿入して局所麻酔下に喉頭・下咽頭病変に対し手術や生検を行う手技は、低侵襲で外来でも施行可能であり、当科では術者と助手の2名、または術者単独で行っている。この経口的喉頭内視鏡手術の有用性、安全性について検討した。対象は2015年1月-2019年11月に長崎大学病院耳鼻咽喉科にて局所麻酔下に本術式を行った78名で、疾患は喉頭・下咽頭疾患79例（腫瘍33例、一側性声帯麻痺16例、声帯ポリープ8例、喉頭肉芽腫7例、声帯結節5例、その他10例）である。結果は、これらに対し声帯内注入79件、生検35件、腫瘍切除24件、嚢胞切開4件、レーザー蒸散1件の計143件（重複3件）を行い、助手と2名で83件、術者単独で57件を施行しそれぞれ98.8%、94.7%といずれも高い完遂率であった。合併症は喉頭浮腫と血管迷走神経反射が各1例みられたが、いずれも軽症であった。本術式は、有用で安全な術式であると考えられた。

【同門会学術賞】

○佐藤智生

Prevalence and characteristics of children with otitis media with effusion in Vietnam

Satoh C, Toizumi M, Nguyen HAT, Hara M, Bui MX, Iwasaki C, Takegata M, Kitamura N, Suzuki M, Hashizume M, Dang DA, Kumai Y, Yoshida LM, Kaneko KI

Vaccine 36:2613–2619, 2021

Purpose: Otitis media with effusion (OME) commonly occurs and persists in young children. It can cause hearing impairment and damage to the tympanic membrane without treatment. We aimed to determine the prevalence and association of *Streptococcus pneumoniae* in the nasopharynx of healthy children before the introduction of a pneumococcal conjugate vaccine. Methods: In October 2016, nasopharyngeal swabs collection and otoscope examinations by an otolaryngologist were conducted in children aged less than 24 months in Nha Trang, Vietnam. OME was diagnosed as the presence of middle ear fluid using a digital otoscope equipped with a pneumatic otoscope. Quantitative PCR targeting pneumococci-specific *lytA* (the major autolysis gene) and bacterial culture were performed to detect *S. pneumoniae*. The point prevalence of OME in the study area was estimated. The association between OME and *S. pneumoniae* in the nasopharynx was evaluated using a multivariable logistic regression model. Results: Among the 274 children who underwent bilateral ear examinations and nasopharyngeal swab collections, 47 had OME (17.2%, 95% confidence interval [CI] 12.9–22.1%) and 96 were colonized with *S. pneumoniae* (35.0%, 29.4–41.0%). OME and nasopharyngeal *S. pneumoniae* carriage were positively associated in children aged less than 12 months (adjusted odds ratio [aOR] 3.83, 1.40–10.51). Day-care attendance and living in a rural area were independently associated with OME (aOR 5.87, 2.31–14.91, and aOR 3.77, 1.58–8.99, respectively).

Conclusions: The nasopharyngeal pneumococcal carriage was associated with OME among children aged <12 months. A further study after introducing a pneumococcal conjugate vaccine (PCV) is required to better understand the effect of PCV and *S. pneumoniae* carriage on OME in young children.